

2018.12.5



式会社と連携して生ゴミやし尿・浄化槽汚泥を資源にバイオガ

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県を11月22日から4日間訪問してきた。その中で南三陸町は、高台移転という戦略的手法を選択した町だ。町役場等の公共施設と住宅を高台に移転・再整備、海岸沿いの旧市街地には商店と水産加工場などの産業機能を置く機能分離型まちづくりだ。現在でも、海岸沿いでは土地のかさ上げ工事は続きカーナビも役に立たない。そんな中、沼田地域の高台を上ると突然、真新しい4階建ての復興・個人住宅が姿を現す。その隣には町役場、病院、福祉センターが並び、新たな南三陸町の中心地となっている。

高台の広場に設置されたエコステーションに住民がゴミを持ち込み21種類に分別していた。アマタ株式会社と連携して生ゴミやし尿・浄化槽汚泥を資源にバイオガ

再生へ二つの道を進む南三陸町

スと液体肥料を製造し、資源循環型の「バイオマス産業都市構想」を進めている。いわば復興から生活の再生へ、それも支援される暮らしから、自らが役割を担い、地域資源から電力を作りだし自立する道へとカジを切っている。

もう一つの再生への道は「語り継ぐ」手法だ。住民に最後まで避難を呼び続けた防災対策庁舎は、震災遺構として当面の保存が決定している。津波から327人を守った高野会館（南三陸ホテル観洋所有）も保存する決意を固め、民間の震災遺構として現地に残されている。おかみの阿部憲子氏は「高野会館を見ることが、津波の大きさや地震の被害を実感してもらえと思う。生き残った者として震災を風化させたら亡くなった人に申し訳ない」と、震災の語り部バスツアーを7年たった今でも継続している。

南三陸町は、自立と継承、官と民とがそれぞれが役割を担い再生に向かっていく。ぜひ多くの方も訪れ、その目で確かめてもらいたい。